

研修生レポート

大垣市 都市計画部 建設課



平成 28 年度

国内先進地（災害復興）視察研修に参加して

この度、8月24日から27日の4日間にわたって、東日本大震災から5年が経過した現在の復旧状況や震災時の体験等を確認し、今後の各自治体の災害対策に生かす目的で実施された「平成28年度国内先進地（災害復興）視察研修」に参加させて頂きました。

今回の先進地として釜石市に決定された時点で私は、即座に参加させて頂くことを決断しました。それは、釜石市に岐阜県市長会からの派遣先で、平成24年9月30日から12月28日までの3ヶ月間滞在させて頂いたからです。

1日目は、バス移動のみで北上市に宿泊したのですが、やはり東北は遠いと感じました。2日目に釜石市へ入りましたが、釜石市へさしかかった瞬間、

どこか第2の故郷と言いますか何やら懐かしい気持ちになり、ふと、バスの窓から外を見ると、以前とは違った風景が目飛び込んで来ました。私が、釜石市に派遣された当時は、東日本大震災から1年半が経過した頃で、震災の爪あとが、まだ市内の多くで見られましたが、違う釜石市に来たのかと勘違いしてしまうくらい、新しい建物が建てられ、多くの工事が行われており復興が進行中であることを実感しました。しかし、釜石市役所へ到着すると市役所は、以前と変わらない姿で佇んでいました。市役所では、釜石市の職員の方々に迎えられたので



釜石市町並み青葉通：平成28年8月25日

すが、派遣当時にお世話になった総務課の菊池さんが私のことを覚えて頂いたことに、釜石市の人たちの人情深さを改めて感じ、目頭が熱くなりました。その後、釜石市の職員の方から、午前に、現在の復旧状況や震災時の体験等の説明、午後には市内の現地視察、3日目には周辺地域

の現地視察等をさせて頂き、4日目に帰路につきました。

今回の研修視察を通して強く感じたことがあります。それは、災害に強い庁舎が必要なことです。今年4月に発生した熊本地震でも感じたのですが、庁舎が被災すると、復興のスピードが遅れます。被災された市民の復興にも大きく影響します。災害に強い庁舎が必要な理由がもうひとつあります。それは、職員が必要とされることです。市役所の職員は日ごろ良いイメージを持たれていないと感じることがありますが、被災された市民はまったなしです。被災後、直ちに行動できなければなりません。東日本大震災では、私たちの仲間である多くの職員も被災者となり、優秀な人材を失いました。災害時に庁舎が被災することは、防災拠点の中心となるべき建物と人材を同時に失うところになります。つまりは、災害復興の機能を失うことに繋がるのです。こうした中、県内の庁舎の多くが建て替えの時期を向えています。私たちの庁舎もそのひとつで、平成32年度に完成予定です。今後、災害に強い庁舎へと生まれ変わります。

◎釜石市役所 第1庁舎 →
こちらで復興状況についての講義
を受けました。



← ◎2日目の昼食会場
会場では、大震災に関する写
真展が開かれていました。

高山市 基盤整備部 都市整備課

尾崎啓介



5年ぶりの釜石

私が釜石市に派遣された2011年12月から4年と8ヶ月が経ちあの時のことが過去のものとなりつつあった時に、再度釜石市を訪れる機会を頂きました。あの頃は津波で被災した住宅や商店が数多くそのままの状態に残り、ようやく復興に向けての足がかりを作ろうとしていた時期で、市役所も一応の落ち着きを取り戻し、復興商店街などもオープンするといった状況でした。派遣後も釜石の近況には注目しており、イオンのオープンやラグビーワールドカップの開催決定など、明るいニュースもあり、街の様子も変わってきているのではないかと想像しての訪問でした。

実際に訪れてみると、街にはドラッグストアの建設などがされ、復興公営住宅が完成し、多くの方が新しい住まいを得ているなど、復興が着実に進んでいる状況を実感できましたが、かなりの部分がまだ更地として残っていました。こうした現状が続くことにより復興できた場所と住宅や商店が再建されず実質的に放置されたままの土地とが両極に分かれてしまうのではないかと懸念が残りました。



議場をお借りして、担当者の方から受けた説明で印象に残ったのは、膨大な復興公営住宅の建設事業でした。全部で1,300戸もの公営住宅の建設がここ1～2年以内にほぼ完了し、仮設住宅からの転居を順次進めているという説明でした。個人的に気になったのは、被災者の内のかかりの人が釜石を離れたり、単身の高齢者が病院に入院したりして結果的に1,300戸の公営住宅に空きが出るのではないかとということでした。事実、かなりの人口が震災後に流出している状況をうかがいました。

また、高山市の公営住宅には約700世帯が住んでいますが、その倍ほどの世帯を復興公営住宅という形で抱えることになり、そのための管理、特に被災地特有の住民の心のケアやコミュニティ作りという仕事が今後も引き続いてゆくことが想像されました。

続いて現地視察をさせていただき、鶴住居地区で進められている小中学校の建設現場を拝見しました。津波による大きな被害を受けた学校が高台に移転しての再建であり、校舎跡地にはラグビーワールドカップのスタジアムが建設されることになっていました。周辺では同時に区画整理や道路の付け替え工事がおこなわれており、街一帯で何台もの重機が稼動し、ダンプトラックが行き交う光景は壮観ですらありました。

学校建設は新聞報道等でも取り上げられていましたが、度々の入札不調を経験した工事であったこともあり、工事コストの縮減に非常に配慮された設計内容になっておりました。現場施工が不要な資材の使用などが徹底されていたほか、普通教室にも天井を用いないなど自分達の常識とは異なる仕様となっていました。

ハード的な建設事業は学校建設も併せてほぼ終わりに近づいており、復興のためのハコはほとんど用意されていました。このこと自体、膨大な量の仕事であり、釜石市の職員の皆さんの努力もさることながら、岐阜県からの職員派遣の支援も実を結びつつあると思います。

最終日の現地視察の中で拝見した大船渡や気仙沼の状況も心に残りました。鉄道が大きな被害を受けたため、BRT（バス高速輸送システム）による仮復旧の状況、奇跡の一本松、復興商店街など、テレビなどで見るのとは違いやはり地続きの場所で起きている出来事であることを実感できました。

本研修を受け、災害への備えを充実させる必要を感じたことはもちろん、不幸にも災害に見舞われた場合に自分はどうやって災害対応やその後の復興業務を乗り切るか、改めて想像してみました。被災者は住民だけではなく、職員も被災しています。当時一緒に働いた若手の同僚とも会うことができましたが、今もって仮設住宅に住みながら働かれていることには胸が痛みました。そういった状況にあっても第一線で働かねばならない公務員という立場を今一度認識し、これからも被災地の状況に心を配りたいと思います。

なお、今回の研修中にお世話になりました釜石市役所の職員の皆様、研修を企画・実施してくださった岐阜県市町村振興協会市町村研修センターの皆様には常に細やかなご配慮を頂き、効果的で充実した研修を受けさせて頂きました。また、大変長距離のバス移動でしたが、同行くださったガイドさんが大変幅広い知識でご案内くださり、長時間の移動時間も飽きず、大いに学ばせていただきました。末筆ながら関係者の皆様にお礼申し上げます。



ボランティアの手により釜石市甲子に整備された『こすもす公園』

高山市 危機管理室

黒谷 渉



釜石視察研修に参加して

東日本大震災後、東北地方の被災地を視察させていただいたほか、報道や震災記録等で、あの震災の凄まじさは多少なりとも私なりに聞き及んではいましたが、被災地の復興状況について今回直に見学する機会をいただきました。



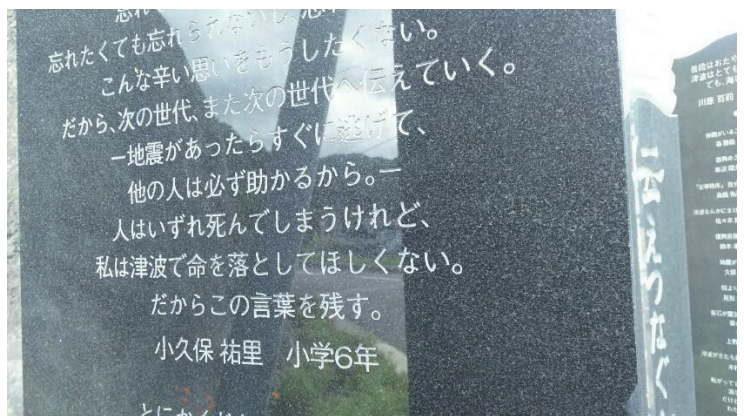
◎被災時の様子

震災から1年以上を経ても、多くの被災地ではガレキの山が公園をはじめ市内いたるところに山積していたと聞いていましたが、5年以上が経過して、ガレキこそ市内の目に付く場所には全く見当たりませんでした。仮設住宅、仮設店舗が多く並んでおり、被災者の皆様が震災前の生活を取り戻すにはまだまだ時間を要するという事を認識させられました。

釜石を歩くと、まちの至る所に津波の高さを示す標識が掲げられています。

また、着々と工事がすすめられている鶴住居地区学校等建設現場では、津波の被害を受けないよう高台に立地させるとともに、万が一の津波の際には逃げ込みやすいよう動線を考慮された設計となっているなど、震災から得た教訓を後世に確実に伝え、二度と同じ被害を繰り返さないための叡智が反映されていました。

また、震災により全住宅の3分の1以上が被害を受けた釜石市唐丹地区には、明治・昭和・平成の3つの時代の石碑が並んで建てられていました。どの石碑も津波の被害を後世に伝える内容であり、東日本大震災を受けてつくられた最も新しい石碑には、地元の子供たちによる津波のおそろしさ、命の大切さ、復興への決意が刻まれていました。子供たちの願いは、釜石市民の皆さんの思いであり、このよう



釜石市唐丹地区の石碑（津波記憶石）

な悲しい石碑をつくるのはこれで最後にしたいという強い意志が込められているように感じました。

被災地の復興は着実にすすめられています。復興工事、住宅再建など多くの課題があるのも事実です。そのような状況にも関わらず、今年には岩手で国体が開催され、さらに釜石はラグビーワールドカップ2019の開催地にも決定されました。スポーツで子供たちに夢を与え、復興支援への感謝を国内外へ示すために釜石みずから立候補されたとお聞きしました。

私が今回の視察で訪れさせていただいた釜石のホテルや駅、お店のホスピタリティはすべて行き届いており、まちぐるみでおもてなしができる体制は十分に整っていると感じました。ラグビーワールドカップのスタジアムは、釜石でも特に震災被害の大きかった地区であり、小中学生による率先避難行動により多くの命が助かった場所として広く知られることとなった鵜住居地区に建設がすすめられています。スポーツの力による釜石の復興と創生にける釜石市民の意気込みに深い感銘を受けました。



WRC2019 メイングラウンド計画図

近代製鉄発祥の地として多くの人々を受け入れてきた都市文化を持つオープンシティ釜石ならではの震災復興の取り組みは、釜石市民のみならず世界中を元気づけることができるものと期待しています。

最後になりましたが、多忙極まる復興の取り組みの最中にも関わらず、快く今回の視察にご対応いただきました釜石市職員の皆様に深く感謝を申し上げます。

高山市 水道部 上水道課

道 下 顕 司



復興6年目の釜石市の現状

私が初めて釜石市を訪れたのは、平成25年7月1日から3ヶ月間に派遣職員として復興支援の時でした。派遣時は災害復興以外にも釜石市の歴史や地形等を学ぶことができ、とても印象深く残っています。2年前に釜石市内の津波で被災された地区を実際に見て感じたことは、被災した建物がいくつか残っていたものの、がれきは撤去されて、幾分かきれいになっていたので、あと3年経てば復興できるのではないかと考えていました。しかし、復興・復旧事業の概要を聞いて、想像以上に時間がかかることを実感し、それだけ被災規模が尋常ではないことに気づかされました。



◎被災時の様子

そのような経験をした災害派遣から約2年経過した町の状況を見て、一部の復興住宅は完成していましたが、ようやく計画されたことが実施されていました。被災箇所では大半の建物が建築し始めており、大規模な津波に遭った地区については、もともとあった道路や堤防は、以前宅地だった場所に道路が整備され、堤防は高く築堤され、地盤はかさ上げにより高く盛土され、山の形状が変わっている箇所もあり、周辺の山並みから、やっと以前の土地形状の面影が分かる状況で、復旧にむけて着々と歩んでいることを実感しました。しかし、まだ仮設住宅が点々と存在する状況を見ると、まだ復旧には時間がかかりそうでした。特に住宅再建ができて、仮設住宅がなくなっても、住民のコミュニティづくりが不可欠となっていて、生活が円滑にできるのかが、気になるところです。

災害復旧と関連した新たなまちづくりとして、平成27年に登録された近代化遺産の世界遺産や、2019年ラグビーワールドカップの開催都市となったことについて、町が、ただ単に被災前と同じ状況にするわけではなく、被災したことによってさらに活性化しようとする意識が感じられました。開催都市の中で、現在唯一スタジアムがない都市なのに、市民グループから初めた活動が、市を動かし世界を動かしたことは、釜石市の災害復興とラグビーに対する熱い心が伝わってきました。日本でのラグビーの人気が出てきたこともあり、2019年までにやらなければな

らない事業がたくさんある中ですが、ぜひ成功してほしいと思います。

災害復旧について、自分自身は、豪雨災害は何度か経験していますが、何百人もの人が影響するような大規模災害の経験がありません。この研修を通して災害対応から印象深いことは、もちろんライフラインの復旧は第一優先ですが、大規模災害時は、特にボランティアや他の自治体からの応援の対応について、被災地の職員と区別し、復旧内容を的確に指示することによって復旧も早くなると思いました。支援者は、復旧という目的のために来ているので、第三者でも協力できることを、あらかじめ決めておくことも災害対応として必要だと思います。また、大規模



◎被災時の様子

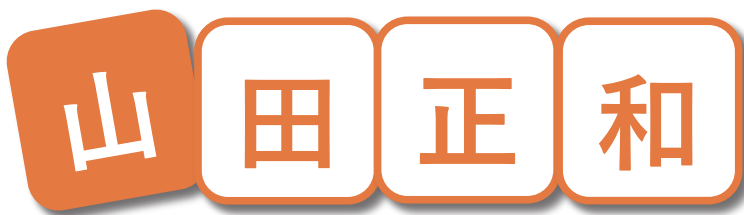
であればあるほど被災直後の対応から最終的な復興を見通しが立てにくいですが、長期にわたる復興の復興計画の策定は、東日本大震災や阪神淡路大震災や過去の類似した災害時の経験を活かして、地域に合った復旧・復興づくりが必要だと感じました。

釜石市の被災3年後の災害派遣、被災5年後の視察研修において、災害復旧といっても、災害復旧・復興中は、通常の業務を協力することも災害対応であることが分かり、被災した町の復興を職務として経験したことは、通常ではできない貴重な体験でした。そして釜石市へは、3年後にラグビーワールドカップ開催されるため、再び出向く機会が増えました。10年、20年経っても、この災害を風化させないように、今後も釜石市の復興に協力、支援していきたいと思えます。



◎三陸鉄道釜石駅のモニュメント「巨大なラグビーボールと猫選手」

多治見市 建設部 建築住宅課



災害復興研修に参加して

私は平成26年1月から3月末までの3ヵ月間、釜石市に派遣されていたので、その後の2年半の間に釜石市及び周辺地域がどのように復興したのかをこの眼で確かめたいと思い、今回の国内先進地視察研修に参加しました。

その間に三陸鉄道南北リアス線全線開通やラグビーワールドカップ2019開催都市に決定、さらには橋野鉄鉱山の世界遺産登録等の釜石市の喜ばしいニュースが流れるたび、再び釜石市を訪れることが楽しみとなりました。

今回の研修は平成28年8月24日（水）早朝に岐阜市のふれあい会館を出発し、岩手県釜石市周辺を視察して8月27日（土）に出発地に戻るという行程でした。

研修初日は一日中バス移動のみで、二日目が釜石市の視察研修でした。午前中は釜石市役所で現状説明を受け、午後からの研修では市内に建設される公営住宅としては最大規模である上中島町復興公営住宅を見学させていただきました。派遣当時は被災者のための復興公営住宅が主に交通の便の悪い郊外に建設され、入居募集直後に満室にならない住宅があると聞いていましたが、この復興公営住宅は交通の便の良い市街地に建設されたこともありすぐに満室になったそうです。震災直後に建設された上中島町応急仮設住宅から転居された方も多く、仮設住宅の入居者は徐々に減少していました。

つぎに旧釜石東中と旧鶴住居小学校が統合されてできる鶴住居地区学校等建設工事の現場を見学させていただきました。東日本大震災では過去の教訓を生かした津波防災教育の取り組みにより、震災時に在籍していた児童・生徒の誰一人欠けることなく無事に避難することができ、「釜石の奇跡」と呼ばれる舞台となった学校です。今回は東日本大震災の津波よりも安全な高台の斜面に計画されていて、視察時は校舎の内装工事を残し完成間近でした。

また、学校跡地周辺についてはラグビーワールドカップのスタジアム予定地となっていました。

ホテル周辺を散策してみたところ、派遣時には眼にすることが無かった復興住宅がいくつも建設されていました。説明者によると、上中島町復興公営住宅だけでなく市内には数多くの復興住宅が建設されていて、平成29年度までに釜石市内の復興住宅の建設が完了するそうです。

二日目の夜、最大で7 m程の地盤嵩上げ工事が行われている浜町を歩いたところ、派遣時は歩き慣れた地域でしたが嵩上げにより道路に段差ができ、至る所で道路の付替が行われ、風景が変わっていたため道に迷う程でした。

釜石市滞在は一日でしたが、視察研修により着実に復興が進んでいることが実感できました。一日も早く全ての被災者が仮設住宅から自立再建や復興住宅に移転することで、昔のような生活を取り戻してもらい笑顔に繋がることを願っています。

三日目は三陸鉄道南リアス線に乗車できました。平成26年4月に運転再開された三陸鉄道釜石駅を利用するのは初めてでした。三陸鉄道は被災地復興のシンボルであり、平日に乗車したにもかかわらず多くの観光客で賑わっていました。車窓越しに見える通常の風景の中に、被災跡地や復興工事現場を見かけると胸にこみ上げるものがありました。

この研修に参加して最も印象的だったのが、陸前高田市の「奇跡の一本松」周辺です。2年半前に訪れた時には一本松の奥に海が見渡せたのですが、今回は海が見えないほど一面に巨大な防潮堤が築かれていました。陸前高田市は津波により1800名を超える犠牲がありました。海が見られなくなったのは残念ですが、今後二度と津波がこの防潮堤を乗り越えることが無いよう祈っています。



奇跡の一本松周辺（H26.3.24 撮影）



奇跡の一本松周辺（H28.8.26 撮影）

この国内先進地視察研修では研修・交流会に対応いただいた釜石市役所の皆様、現派遣職員の皆様、事務局である市町村研修センターの皆様には貴重な体験をさせていただき感謝いたします。そして、被災地の一日も早い復興を遠方より願っております。

多治見市 教育委員会事務局 教育総務課

河村務



国内先進地（災害復興）視察研修に参加して

今回の災害復興先進視察研修先の岩手県釜石市は、岐阜県市長会からの災害派遣で平成 25 年 7 月から 9 月までの 3 か月間復興支援にて派遣された地で、思い出深い気持ちと現在の復興状況を自分の目で確かめたいという思いで今回の派遣に参加いたしました。

釜石市庁舎は、3 年前と変わらず時間が止まっていました。庁舎周辺は 3 年前に建築中であったイオンやホテルが完成し、市民文化会館が解体され、道路が整備され住宅地になっていました。

にぎわいと交流の創出をコンセプトに、中心市街地の再生に積極的に取り組み、中心部に商業・文化・情報交流の拠点の形成を目的もして事業に取り組まれている地区を歩き、市民広場、釜石情報交流センター（ミッフィーカフェかまいし、チームスマイル・釜石 PIT）、商業施設（タウンポート大町）が完成し、災害復興公営住宅が多く建設され、釜石市が災害復興に向け都市機能整備、住宅の住戸確保への思いが感じることができました。平成 28 年から 29 年にかけて多くの住戸が引き渡しされることにより、少しでも多くの方々が仮設住宅から移転されることにより復興に近づいていくと思われます。人と人が交流することによりにぎわいと交流が創出される素晴らしいまちづくりになると感じました。



（釜石市本庁舎）



（チームスマイル・釜石 PIT）

鵜住居地区の被災した幼稚園、小・中学校及び児童館を高台で同一敷地内に建設する現場を視察させていただき、3年前とあまり変わっていないイメージでしたが、盛土はかなり進んでいました。盛土等の工事をおこなって建設をしていくことは、長い時間がかかり大変なことだと実感いたしました。

視察先の施設は各教育施設一帯になっているのと防災拠点としての機能を有し、高台移転に伴い津波での震災地区徒歩圏内に安全な場所確保し、子どもたちだけでなく住民の安全を確保する防災拠点として強化されている。鵜住居地区は、2年後に開催されるラグビーワールドカップ2019のスタジアム整備等のあり急速に復興が加速し行くものだと思います。5年後には全く別物になっていると思われます。



(視察先から鵜住居地区)



(建設中の幼稚園棟)

他の視察先、上中島Ⅱ期復興公営住宅は、住まいとコミュニティの再構築を位置づけた、市民が再びつながりあい、誰もが安心できる豊かな生活を送ることのできる住宅をめざして建設され、釜石市内では最大規模の事業である。災害復興公営住宅内には、見守りの拠点施設としての機能を合わせて持つ地域集会施設や災害備蓄倉庫も有している。災害を経験し、地域コミュニティの大切さや防災機能を有することにより必要であることを確認できました。

唐丹（とうに）の津波記憶石では、過去の教訓を後世に残すために過去の石碑の横にあり、教訓を刻んでいる。過去のことを忘れがちであるが、忘れてはいけない先人が残したものをしっかりと記憶して、自分たちが後世に伝えていかなければいけないと感じました。

今回の視察研修で、災害復興は長い年月が必要であると共に心のケアも必要であると思います。非常事態は全国どこで起こってもおかしくない状況にあります。災害派遣で経験したことや、今回の先進地視察の経験を有事の際に役立てられるようにしていきます。

震災から復興はまだまだ道半ばではありますが、震災による被災された地域の1日も早い復興を願っています。

各務原市 市長公室 防災対策課

中野剛



先進地視察研修に参加して

・平成23年3月11日午後2時46分

あの時、私は公用車のタイヤ交換作業をしていました。しゃがんでいるのに立ちくらみのような感覚。直後に地震であることの庁舎放送が流れ、外を見ると電柱が大きく揺れるとともに電線が波打っている様子が見えました。作業を終え、庁舎内に戻ると田んぼに真っ黒い水が押し寄せ、それから逃げるような車の映像や魚市場の備品があっという間に流されていく映像が映っていました。

その地震から一ヶ月半後、研修で東京に居ました。街の明かりは何度も見ているそれよりも暗く、電車は空調を止めているため窓を開けて運転。研修所では時折余震に見舞われました。

その研修の中で東北地方出身者に写真をもらいました。それはあの地震に災害派遣した際に撮影したものとのことでした。中には津波が襲ってくる瞬間を連続で撮ったものもありました。

・被災地へ

あの地震から5年が過ぎ、映像や写真でしか見たことがない被災地への研修に参加できるまたとない機会、研修の募集チラシを見た瞬間、「これは行かなければ！」と感じました。片道13時間のバス移動と記載されていてもまったく気になりませんでした。

しかし、実際に13時間のバス移動を体感すると、ホテルに着くなり爆睡してしまうほど体力を削られました。

・日本のチベット

約900キロの移動を経て到着した釜石市役所はさすが昭和29年建築というような内装で、研修を受けた議場はエアコンが設置されていないものの、海からの風が非常に気持ちよかったです。

最寄りのマクドナルドまで90キロもあるため、自虐的に「日本のチベット」と呼ぶことがあるようです。しかし、まちづくりについてビジョンを持って復興を進める様子はチベットではなく、戦後の復興である高度経済成長のように感じました。市内各所で建築工事が行われており、

道路もかさ上げ工事の途中のためデコボコが残るアスファルトでした。

・釜石での防災教育

釜石市における防災教育は非常に充実していたものであり、それは津波襲来時に学校の管理下にあった児童・生徒に犠牲者がなかったことにより証明されています。また鵜住居小学校・東中学校に通う子供も持つ市役所勤務の親は、「あそこの学校なら助かる」と言ったとのことでした。

この鵜住居小学校・東中学校は、後に「釜石の奇跡」と呼ばれる避難行動をした児童・生徒で、特に中学生は避難所生活においても「助ける人」としての役割をしっかりと果たしていました。

・防災に関わる人間として

前年度まで消防職員という身分でしたが、現在防災担当として各務原市の現状を見てみると、釜石東中学校生徒のように「助ける人」になれている市民が多いとはいえない状況にあると感じます。

高級な装備を揃えても、耐震性の高い設備を造っても、結局人を助けるのは人であり、助ける人を作るのも人です。今回の研修を通じて、災害から立ち直ろうとする、また災害から命を守ろうとする人の強さを感じました。被災地を見てきたものとして、災害に強い人づくりにいっそう力を入れようと改めて感じました。

・おわりに

震災により被災された地域の1日でも早い復興をお祈りします。



震災9日後と研修時の釜石市内

各務原市 都市建設部 河川公園課

飯 沼 光 二



国内先進地（災害復興）視察研修に参加して

この視察研修に参加し、被災状況、復興状況を確認することで、さまざまな印象に残ったことや災害対策等を学ぶことができました。

私は、今まで東北地方に行ったことは無く、震災の状況も映像等でしか見ることはありませんでした。今回初めて震災後5年程経過した釜石市等を訪れ、町の様子を見てみると、大規模造成（区画整理事業）、道路やその他構造物等のインフラ設備の整備、小中学校の建設、復興公営住宅や家屋も建て直されているものが多く、また、日中は土砂運搬のダンプトラックが頻繁に行き来しており、復興はかなり進んでいるという印象を受けました。しかし、釜石市鶴住居地区や陸前高田市等を見てみると、津波でさまざまなものが流され平野となった土地が広がっており、被害は甚大であったことを再認識しました。



今回の研修で特に印象に残ったことは、4点あります。

1つ目は、釜石市役所をはじめとするさまざまな建物に、津波浸水高さをあらわす標識が取り付けられていたことです。釜石市の建物の多くは、どれも1階部分は浸水していました。この標識により、津波の高さを忘れることなく、避難の際も高台に逃げる必要があることを再認

識できると思いました。

2つ目は、釜石市の災害復興公営住宅の現地視察についてです。災害復興公営住宅とは、被災した方々の安定した住戸の確保を図るものであり、平成28年度末までに引渡し戸数は1,127戸ということで、全体の86%を予定していることを聞き、事業はかなり進んでいると感じました。復興公営住宅を現地で見ると、建物自体きれいであることはもちろん、人々のつながりを再生・醸成することを目的としたコモンスペースが設けてあることや、住戸間の隔て板を取

り払い、高齢者の見守りを兼ねた井戸端空間的なバルコニー等も設置しており、さまざまな工夫を感じさせられました。一方、復興公営住宅の道路向かいには仮設住宅があり、未だ仮設住宅等で不自由な生活をしている方々もみえました。

3つ目は、釜石市鶴住居地区の学校等建設現場の現地視察についてです。3月11日に発生した津波の高さよりも高くなるように造成された安全な高台に、建設の最中でした。幼稚園、小学校、中学校の教育の場としてだけでなく、地域活動の拠点、災害時の避難場所の機能も備えた複合施設として整備されているようで、印象深く感じました。また、設計段階から工業者が施工性を検討し設計に反映し、工事期間を短縮する手法である入札方式、E C I方式を採用しており、そのような方式を採用している建設現場を視察することができ、良かったです。

4つ目は、陸前高田市の一本松の現地視察についてです。奇跡の一本松やその周辺の様子は、映像等で頻りに目にする機会がありましたが、実際に見ることは初めてでした。道路等のインフラ設備の整備はされていましたが、周辺には建物等はあまり無く、一部流されなかった全壊している建物が少し残っているだけで、平野が広がっ



ていました。特に印象的だったのが、写真にある建物です。松が流されなかった要因のひとつとして、この建物が防波堤の役割を果たし、津波の直撃を防いだと推測されていることは知られていますが、実際に見ると非常に印象深く感じました。

最後に、私の地元岐阜県でも、東海・南海地震の発生確率が年々上昇しているといわれています。決して他人事ではありません。今回参加した研修で学んだこと印象に残ったことを参考に、明日は我が身と心に留め、日々の業務に取り組んでいきたいと思えます。

各務原市 都市建設部 道路課

大 山 英 朗



国内先進地（災害復興）視察研修に参加して

まずは、この研修のためにお忙しい中現地の説明や案内をしてくださいました職員や現地のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

本研修では驚くことばかりでした。研修に参加する前、災害から5年という月日が流れていることから、災害の爪あとなどは少なく新しい町並みが多く見られるのだろうと思っておりました。しかし、現地では既に完成している建物もありましたが、ほとんどまだ建設中、若しくは建設前の状態でした。また、バスで移動中にも数多くの仮設住宅が見られ、まだ住まいに苦労されている方が多く、復興にはとてつもない時間と労力が必要であることが感じられました。

印象に残った研修先として、釜石市役所で釜石市の概要、被災状況、釜石市の復興ビジョン、復興に係る事業費、現在の課題について等を説明いただいたものです。まず、釜石市がここまで被災していることに驚きました。特に産業関係の被害で市内全事業所のうち57.7%、漁船が97.6%被災しているそうです。道路関係の仕事をしている私にとって、道や構造物を作ることは役所の人間で何とかできそうに思えますが、産業の復興というのは役所の力だけでは難しいと思います。そんな中、ラグビーワールドカップの開催地が釜石市にも決定しました。ラグビーワールドカップが開催されることによって産業がすぐに元気にならないかもしれませんが、ラグビーワールドカップの成功が市民の活力につながって欲しいと思います。



RWC 会場の建設現場

次に釜石市鵜住居地区学校等建設工事の現場研修が印象に残りました。現在建設中である施設はとてもデザイン性が高く、鵜住居地区のシンボリックなものになるのだなと思いました。建設中の建物も印象に残りましたが、それ以上に現場から見下ろした鵜住居地区の風景に驚きました。



釜石市鶴住居地区学校等建設工事場所から見た風景

そこから見える景色には人が賑わっていた形跡はほとんどなく一面に広がる土の広場だけでした。しかし、そこからは津波のエネルギーの大きさとそこから復活しようとする人のエネルギーが分かる景色でした。写真を見ただけでは分からないと思いますが、実際に見ると言葉が出ないほどです。数年後、完成された町並みをもう一度見てみたいと思います。

もう一つ印象に残った研修先が陸前高田にある奇跡の一本松です。テレビなどで何度か目にしていたのですが、実際に見ると本当にこの一本が残ったのは奇跡なんだなと思いました。また、この周辺は被災したままの状況が多く残っており、一本松の奥には被災されたままの陸前高田ユースホテルがあり津波の恐ろしさが見て取れました。その奥には大きな防潮堤が建設途中でした。防潮堤より内陸側にいけば海の様子は全く見えない状況で、建設に賛否両論あると言うのもわからないでもありませんでした。しかし、陸前高田ユースホテルのような建物をもう再現させないためにも必要なのかもしれないと思いました。



陸前高田ユースホテル

最後に、今回研修で訪れた地区や地域以外にも甚大な被害を受けてそこから復興に向けて突き進んでいるところは多くあると思います。そのすべての地域が一日でも早い復興と発展をできるように願っています。

本巢市 企画部 企画財政課



災害復興研修に参加して

平成23年3月11日、当時、私は総務課に所属し、選挙・防災を主に担当しており、その日は、ふれあい福寿会館で防災講演会を聴講しておりました。

受講中、ゆったりとした揺れに襲われ、体調に異変をきたしたのかと思っておりましたが、東北の地震が原因と判明し、大規模な地震が発生したのであろうと思い、帰庁の車の中で、ラジオを聴いてみると約10mの津波が東北沿岸地域を襲っているとの放送が繰り返し流れていました。

帰庁し、職場のテレビを見て、その状況の凄まじさに愕然とし、東北はもとより、自分の仕事はどうなるのであろうかと不安に駆られました。

翌日から、義援物資の調達等の被災地支援業務に加え、統一地方選挙に向けた準備を行う業務に追われる日々が続きました。

あれから早くも5年が経過し、この視察研修が行われることを聞き、当時、防災担当でありながら、日々の業務に追われ、被災地に赴くことができなかつたこともあり、研修に参加させていただきました。

研修地の釜石市役所に到着してみると第1庁舎の公用車駐車場の間口を超えた高さに、東日本大震災の津波浸水深を表示するプレートが貼られ、沿岸から約300m離れたこの場所でも高い津波に襲われたことに驚きを感じました。

歴史を感じる庁舎の議場にご案内をいただき、市民生活部長様からのご挨拶で、震災後6月から岐阜県市長会を通じて職員派遣による支援が入り、これまでに163名の職員派遣が行われ、復旧・復興に寄与していることにお礼をいただき、復興状況につきましては、今後、22地区に1,314戸の復興住宅を建設する予定であるが、現在の進捗率としては54%で、未だ、2,030戸、3,349人の方が仮設住宅住まいであり、まだまだ、支援が必要であるとのことでした。

続いて、復興推進本部及びラグビーワールドカップ推進室の職員から釜石市の復興状況及びワールドカップの誘致につきましてご説明をいただきました。

釜石市の被災状況につきましては、1,062人の方が震災により亡くなられ、家屋についても29%の4,705戸が被災するなど甚大な被害を受け、復興に向けた取り組みの中で、全被

災世帯に対して、家屋等の再建に向けたアンケートを行っておりますが、未だ約50世帯の方が未決定であり、職員の方が全ての被災世帯の方がどう再建するかを決定するまで、追跡調査を行うと強い意志を持ってみえたのが印象的でした。

釜石市においては、平成23年に策定した復興プランに基づき復旧・復興に向けて取り組んでおられ、イオンタウンが整備される等、市の復興に向けた整備が進みつつあります。

しかしながら、復興を推進する過程において、復興住宅の整備に伴うコミュニティの再生や震災前の市予算額、約170億円に対して震災後は復興交付金が交付されるため、約10倍の1,700億円の予算規模に膨らみ、膨大な事務量に対して市職員が大幅に不足しているといった多くの課題が発生しているとのことでした。

復興に向け、こうした課題が山積する中においても、ラグビーワールドカップ2019の開催を誘致し、復興のシンボルとして将来を担う子どもたちに夢と希望を与え、ラグビーを活用したまちづくりへの取り組みが行われていることを聞き、復興と復興後のまちづくりに向けた取り組みを激務の中、市職員等が一丸となって取り組んでみえることに感銘を受けました。

午後からは、総務課の白岩様の案内により、復興中の釜石市内を見せていただきました。市内において最も甚大な被害があった鶴住居地区につきましては、土地の嵩上げ工事に加え、小中学校と幼稚園が同一敷地内に建設されている建設現場を視察させていただきました。

復興交付金の関係から震災前のクラス数を確保する整備事業が実施されていますが、完成後、そのクラスが埋まるかどうかといった課題があることを聞き、一人でも多くの児童生徒がこの学校で学べる日が来ることを祈念します。

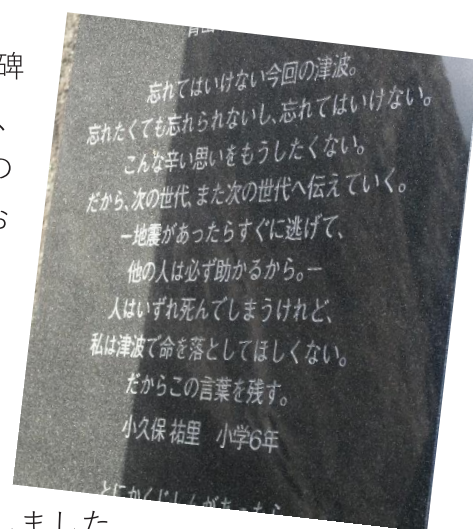
また、唐丹本郷地区を案内いただいた際、これまでの津波石碑に加え、今回の大震災による津波被害の石碑が新たに建立され、その石碑には津波による被害を2度と繰り返さないよう、地域の子どもたちが後生へ津波の恐ろしさを伝える碑文が刻まれており、最も印象に残るものでした。

夜の現地及び派遣職員との交流会において、釜石市職員の方が、今でもあの日のことを思い出すと涙が出るとお話しをされており、被災された方々にとっては、何年経過しても心の傷は癒えないことを改めて実感させていただきました。

早くも5年が経過したという認識の中、今回の研修に参加しましたが、釜石市の復興の状況を見ると、被災地においては、まだ5年しか経過しておらず、いち早い復興に向け釜石市職員の皆様が、様々な課題に立ち向かっている姿を見て、自分の仕事に対する姿勢を見直す必要があると痛感しました。

最後になりますが、復旧・復興に向けお忙しい中、私共の視察研修に時間を割いていただきました釜石市職員の皆様に感謝申し上げます。

頑張ってください釜石市職員の皆さん、そして頑張ろう日本。



本巢市 企画部 企画財政課

市川福太郎



国内先進地（災害復興）視察研修に参加して感じたこと

私は、震災が発生した年の7月に、福島県いわき市で災害復興支援業務に従事させていただきました。罹災証明発行のための家屋の被害状況調査業務に携わったため、様々な被害状況を現地で見たと経験がありました。この時、震災発生から4か月が経っていましたが、道路などインフラの復旧はほとんど手付かずで、罹災証明の発行業務など、震災によって発生した（または拡大した）大量の業務に追われる状況だったことが思い起こされます。市役所周辺の歩道は、亀裂の入った箇所があちらこちらに散見されており、被害状況調査のために車を走らせていても、アスファルトが波打っていたり、道路崩壊のため通行止めの箇所が沢山あったりと、未曾有の災害の恐ろしさと、それに対応していくことの難しさを身をもって感じた記憶があります。当時のいわき市では、長期間の重労働により病気休暇の職員が増えたり、リーダーシップをとれる人材が不足したりと、過酷な状況下での業務運営を余儀なくされており、マンパワーを補うのは組織力しかないということも教えていただきました。

あれから5年5か月が経過し、「風化」という言葉も耳にするようになってきました。震災の年に復興支援業務に携わった私でさえ、「風化」している自覚はないものの、復興はかなり進んでいるだろうと安易に考えていました。

案の定、釜石市へお邪魔したことで、その考えが安易だったことがはっきりしました。実際に現地で職員の話の伺うとともに、今なお残る仮設住宅や、新たに建設が進む復興支援住宅の様子、かさ上げ工事や学校の建設現場など、現地の状況について視察させていただき、大津波の恐ろしさと、真の復興と呼べるにはまだまだ長い時間がかかることを改めて実感し、自分の感覚の甘さを痛感しました。

今回、研修に参加するにあたり、現在の復興状況についてインターネット等で色々と調べていたのですが、「岩手、宮城、福島3県の沿岸部を中心とする48市町村で、復興に必要な職員が不足している」「特に土木など技術系職員の不足が目立ち、その背景には復興事業の本格化などに伴い、民間企業と人材の奪い合いが生じている」「他地域の自治体も行政改革で職員が減り、派遣が難しくなっている」など、被災自治体の深刻な職員不足問題が依然として浮き彫りとなっていることを知り、当時のいわき市の状況を思い浮かべながら、現在の復興状況と合わせてこの点も非

常に気になるところでした。

釜石市復興推進本部事務局の職員に話を伺ったところ、市の一般会計予算額は、震災前と比べて約 10 倍に膨れ上がったにも関わらず、その執行スピードは、震災前よりも数倍の速さが求められるということでした。実際に市内のいたるところで見られた工事現場の数が、まさにそのことを物語っていました。

そんな状況の中、釜石市の正職員数は約 400 人、派遣職員は約 100 人で、合わせて約 500 人という体制でした。約 1 千億円超の予算規模の市政運営を、約 500 人で進めていくというのは、通常の市町村の感覚では到底考えられません。本巣市では約 150 億円の予算規模で正職員約 300 人強という体制ですが、それでも職員不足と言っている現状です。今回、復興状況の現場を生で見て、職員の声を生で聴いたことで、被災自治体の職員不足問題を肌で実感することができました。

岐阜県市長会から釜石市には、これまでに延べ 153 人の職員が派遣されています。派遣の意義は、人的支援という側面と、実際に被災地で実務に携わった人材を増やし、今後大規模災害が発生した際にそのノウハウを活かすことの 2 つの側面があります。今回の視察では、派遣の意義とその重要性を再認識することもできました。特に、自分も含め、派遣していただいた職員にとっては、後者の側面を十分肝に銘じなければならないと考えています。

今回の貴重な経験を胸に、通常業務はもちろんのこと、有事の際にも役立てていかなければならないと改めて強く感じた次第です。

最後になりましたが、釜石市の皆さん、研修センターの皆さん、研修生の皆さん、そして忙しい業務の中、快く送り出してくださった職場の皆さんに感謝申し上げ、本研修の感想といたします。



▲昼食会場のホテル入口にて撮影。津波浸水ラインの高さがその恐ろしさを伝えていました。



▲地元子どもたち 91 名のメッセージが刻まれた津波記憶石。心が打たれました。

海津市 危機管理局 危機管理課

児 玉 靖



国内先進地（災害復興）視察研修に参加して

平成28年8月24日（水）午前7時30分に、定刻通り「ふれあい会館」を出発した。バスに揺られること13時間で目的地である北上市に到着した。到着は夜だったので景色等はよくわからなかったが、いよいよ明日から、5年前に未曾有の大震災を経験された釜石市を研修できるということで、やや興奮気味に床に就いた。



【釜石市役所】

外壁には「東日本大震災津波浸水深」が表示してあったが、岐阜からたった13時間で何が起きたのか、何か狐につままれたというか、タイムスリップしたかのような気持ちになりました。市役所で復興状況、ラグビーワールドカップ等の説明をお聞きしたが東日本大震災発災当時も大変だったと思うが、復興途中の今も苦勞されているのがひしひしと伝わってきました。

交流会では、釜石市役所職員の方から発災当時のお話を伺っていると途中で「ごめんなさい、当時のことがフラッシュバックしてきて」と目に涙を浮かべておられたのがとても印象的でした。建物等の復興は進んでも、震災で痛めた心の復興はまだまだ時間がかかる、いや失礼ながら、痛めた心は、一生癒えないかも知れないと思うと他人事ではなく私の心も痛みました。

【鵜住居地区・花露辺地区】

鵜住居地区では学校等建設現場等を研修させていただいたが、各所での土地のかさ上げで以前の景色はもうなくなってしまったのだろうと思いました。学校は、国道から約21mも高台にあり、毎日、生徒が上り下りするのは大変だと思う反面、足腰の強い人間に成長するのではと期待もしてしまいました。花露辺地区では、高台に建築された復興住宅を研修させていただいたが、高台の復興住宅で生活される方は、買い物が大変ではないかと、特に高齢者が下から歩いて荷物を運ぶのは無理なのでは？私でも心が折れそうです。しかしながら、津波から命を守るには高台での生活も致し方ないのかな？また、防潮堤がないことをインターネットで調べると「防潮堤で

海が見えないのは逆に危ない。防潮堤がないことで『まず逃げる』意識を持続できる。ここの避難訓練では、お年寄りも皆本気で走る」という自治会長のお言葉を見つけましたが、大きな災害経験のない地区の住民は、すぐに、ハード面の強化に頼りがちだが、これが「ハード対策の逆効果」にならないか心配をする。花露辺地区の皆様はハードに頼らず、景観を崩さず、自然と共存して生きていく姿に感動を覚えました。

【奇跡の一本松】

最終日は、三陸鉄道で途中まで移動をし、奇跡の一本松を研修した。当市にもローカル鉄道が通っておりますが、三陸鉄道はさらにローカルでしたが、何かすごく温かみを感じました。運転士さん？による説明、三陸鉄道全線開通の映像を見て、住民の皆さまが大変喜んでおられる姿を思い出しましたが、実際に三陸鉄道に乗車してみると喜ばれたお気持ちがわかるような気がします。



奇跡の一本松付近は350年にわたり7万本の松が茂っていた陸中海岸国立公園（現三陸復興国立公園）や日本百景にも指定されていた景勝地であったらしいですが、今は景勝地というより、海の見えない防潮堤を見て私は「三陸の要塞」のような印象を受けました。海岸でありながら海が全く見えない海岸線、未曾有の大震災は個人の思い出を奪うばかりか、日本の歴史ある景色さえも奪ってしまう。この地は将来、景勝地から観光地に代わっていくのか？。復興で活躍中の行き交うトラックを見ていると何か寂しい気持ちになりました。

奇跡の一本松付近は350年にわたり7万本の松が茂っていた陸中海岸国立公園（現三陸復興国立公園）や日本百景にも指定されていた景勝地であったらしいですが、今は景勝地というより、海の見えない防潮堤を見て私は「三陸の要塞」のような印象を受けました。海岸でありながら海が全く見えない海岸線、未曾有の大震災は個人の思い出を奪うばかりか、日本の歴史ある景色さえも奪ってしまう。この地は将来、景勝地から観光地に代わっていくのか？。復興で活躍中の行き交うトラックを見ていると何か寂しい気持ちになりました。

【気仙沼復興商店街】

バスから降りると、そこには商店街の方々が明るい笑顔でガイドマップを一人一人に配布をしていた。ガイドマップを片手に商店街の中を歩くと、言葉は悪いですが本当に肩を寄せ合うように営業をされておられました。スナックもあり「カラオケの音は間違いなく外に漏れるよなあ」なんて思いつつ散策させていただきました。バスの出発は、商店街の方々に満面の笑みで、手を振られながらの出発でした。あの笑顔を見ると、未曾有の大震災から5年、「本当に一生懸命復興のために頑張っておられるのだなあ」と逆にこちらが被災者の方々に元気と勇気をいただきました。

【結言】

冒頭でもふれたましたが、バスでたった半日移動した現地では大変な震災があり、現在は復興作業が一步一步進んでおりますが、今のところ平和な岐阜に住んでいる我々は、この平和な今、何をすべきか？防災という点では各行政取り組んでおられると思いますが、今から「復興」ということも考えておかなければならないと強く思いました。被災地の一日も早い復興を祈念いたします。

輪之内町 総務課

神野裕崇



国内先進地視察研修を終えて

東日本大震災より5年の月日が経過し、恥ずかしながら初めて被災地を訪問しました。実際に復興に向けて取り組まれている岩手県釜石市・陸前高田市を中心に視察し、テレビやインターネットなどメディアから得た情報でのイメージでしか無かった震災の被害・復興の現状を間近で見ることができ、貴重な経験をすることができました。

釜石市役所にて震災から現在までの状況報告を受け、5年の年月を経てショッピングモール、復興住宅やビジネスホテルなどが建設されており、震災直後の写真等と比較をすると、景色は一変していました。しかしながら、現在も3,000人以上の方が仮設住宅での暮らしを送っており、減っていないことや、被災世帯に対する今後の意向調査が完了していない現状もありました。また実際に岐阜県より派遣され、現地にて業務に取り組まれている職員の方々と交流させていただき、現在も職員不足は続いていること知りました。

復興状況の報告や交流を通し、話を聞いた後、釜石市鶴住居地区や陸前高田市を視察し光景を目の前にしたとき言葉がでませんでした。幹線道路を復旧し、常時往復しているトラック、土地のかさ上げ作業が続いていました。建物もほとんど見当たらない状況でした。地域の大部分をかさ上げする作業には、時間を要し、その作業の後でしか建設できないもどかしさも感じました。津波により壊滅的な被害にあった沿岸部、現在は復興のシンボルとなっている『奇跡の一本松』を見て、およそ7万本もの松林で観光地として賑わっていたかつての地、日々かさ上げ作業をしている土地、防波堤建設作業の光景が広がっていました。震災以前の状況がイメージすることができませんでした。5年の月日がこれほどまでに短く、災害復興には10年、20年のスパンで考えていく必要があることを思い知らされ、自然災害の恐ろしさを理解させられました。

三陸沖津波地震を経験し、防災・減災に力を入れて取り組まれている地域であっても、想定外といわれる東日本大震災の災害復興に数十年の計画が必要という事実は、東南海大地震が懸念されている東海地方、輪之内町に置き換えて考えるよい機会となりました。どれだけの備えをすれば大丈夫なのか誰にも分からない、災害の規模は様々で予想することはできない状況の中、できる限りの防災・減災対策を行っていかねばならない難しさを感じました。

そんな想定外の震災の中、釜石市の小中学生が避難し高い生存率で『釜石の奇跡』と呼ばれた

ニュースが思い浮かびました。視察していた際に地元市民の方に尋ねてみました。この地域には古くから『津波でんでんこ』という、『大きな揺れを感じたら、すぐに津波が押し寄せる。一刻も早くでんではらばらに逃げて、命を守れ。』という教えがあることを教えていただきました。この教訓に基づき、避難訓練を重ねてきた小中学校の生徒だったからこそ、迅速な避難ができ、明るいニュースとして奇跡と賞賛されたのだと感じました。

また今回の視察において、同じ行政職員として災害時はどのような状況で、対応する中でどんな問題が発生していたのか、現場で働く人の声を聞くことに課題にしました。震災発生時、目の届く範囲のことしか情報は入ってこなかったと知り、電話、インターネット、道路とインフラが機能しなくなった時、情報収集することすらできない状況が続く怖さを学びました。すべて重要な業務ではあるが、優先順位をつけてひとつずつ確実にを行うことが大切とのことでした。その判断を迅速に行えるか、決断をできるか、その言葉の裏にあるステップを考えると簡単なことではないと感じました。加えて、避難所の状況、市民やメディアからの問合せ、次々に発生する膨大な災害業務、常に想定外の事態にかき乱されていたことなど、報道では知る事のできない貴重な声を聞くことができました。

自分が同じ状況下に置かれたとき、庁舎機能が壊滅的な状況の中、一体何ができるのだろうか。と自問自答を繰り返す貴重な機会となりました。普段自分なりに防災というものや、震災の怖さを考えているつもりでいたものの、実情はかけ離れていました。いつどこで災害による非常事態が起きてもおかしくない状況の中、被災地の現場、行政の状況、住民の声など実際に経験できたことは、自分にとってかけがえのない時間となりました。個人として被災地のためにできることは限られてしまうけれど、想いを寄せると共に、学んだこと、感じたことを一人でも多くの人に伝え、有事の際には役立てていければと思います。

最後に研修を通して、1番心に残っている言葉を残しておきたいと思います。

東日本大震災の石碑より『100回逃げて、100回来なくても、101回目も必ず逃げて!』中学2年生の言葉でした。この言葉は、誰もが最初にとるべき行動であり、自分の命は自分で守るという避難の原点を再認識できました。『すべては命あってこそ』と感じ、心に残っています。



揖斐川町 住民福祉部 子育て支援課

高橋富士夫



被災地視察研修に参加し感じたこと

1. はじめに

私は、東日本大震災被災地で今回視察した釜石市に隣接する大槌町の役場に平成 25 年 10 月から平成 28 年 3 月まで福祉部門の派遣職員として勤務しました。派遣期間中は、釜石市にも岐阜県からの派遣職員がいる事は知りつつも交流の機会がなかった事から、現地の派遣職員との交流を通して応援すること、また 3 月に派遣期間が終了して 5 か月経過した被災地の状況を確認し、改めて今後の災害対応などについて意識を高める目的で参加をしました。

2. 全体的な感想

震災から 5 年 5 か月を経過し、災害公営住宅や学校等ハード面での復興は進んでいる状況は確認できましたが、かなり遅れている印象を受けました。

新しく建設された公営住宅の道を隔てた敷地には多くの仮設住宅が建ち並び、そこに暮らしてみえる方々の一日も早く新しい生活が出来る事を祈るばかりです。釜石市役所職員からの説明の中でも、「今までも多くの職員を派遣して応援していただいたが、復興には時間がかかり、これからも職員の派遣等多くの支援が必要」との言葉は、東北被災地から遠く岐阜県に住み、被災地の復興状況に関する情報が乏しいなかではやむを得ないですが、大規模災害による復興には長期間にわたる人・物・財政をはじめとする多くの支援が必要なことを再認識しました。また、多くの職員が被災地で頑張っていることを誇りに思います。

3. 釜石市の復興への取組みについて～2019 ラグビーワールドカップにかける思い～

現地視察の際、試合会場となる建設予定地を確認できましたが、開催まで 3 年と迫る中で開催に間に合うのか、開催後の運営に不安は無いのかなど多少の不安を感じました。また釜石市職員との話の中では地域での説明会で「復興とワールドカップのどちらが大事なのか？」など被災者からの意見がある中で、ラグビーワールドカップにかける釜石市の強い思いは、事前に受けた内容について説明する職員からも伝わり、現在取り組むワールドカップ開催を生かした震災復興と地域の成長戦略に結びづくりへの取組みが成功するものと確信しました。

4. 釜石市の鵜住居小学校・中学校建設現場から

震災時の津波により犠牲者が出た釜石市鵜住居地域で山の掘削等により造成した高台で建設が進む小中学校の視察では、まず建設現場の高さに驚きと、またこの場所ならば安心して子どもたちが学べると確信しました。

建築内容についても、工事費用を押さえながら子どもたちがより使い易くするための工夫がされている事が説明されました。学校を中心として地域とつながりを大切にした街づくりを進めてほしいと思います。

5. 先人に学ぶ ～釜石市 星座石・津波記念碑～

過去に東北沿岸部を襲い、先人たちは教訓を石碑に込めていた。「(石碑の建つ)ここから下には家を建ててはならない」。しかしながら、津波災害から月日が経過し先人から伝えられてきた教訓は生かされること無く、東日本大震災でも多くの家が流され多くの犠牲者が出ました。災害場所は過去にも起きていた事例は数多い。台風等大雨による土砂災害や河川の氾濫等も同じ事が言えます。防災について過去の大災害の経験を生かさなくてはならない。職員として肝に銘じなければならぬと強く感じました。

6. 陸前高田市の復興状況から感じる事

東日本大震災津波により市中心部が壊滅的な被害で多くの犠牲者が出た陸前高田市の盛り土作業は他の被災地に例を見ません。近い将来その場所には商業地などが予定されていて、派遣期間中も何度となく足を運びましたが、この場所に街が復興出来るのか不安な想いが拭い去れません。「奇跡の一本松」で観光バス等が行き交い観光客はある程度訪れるものの、今後の街づくりは困難が予想されます。それ以上に住民の不安はそれ以上と想います。どのような街ができるのか今後も注視していきたいと思います。

7. 気仙沼市の（仮設）復興商店街を視察して

被災地では「復興商店街」を「福幸商店街」など言葉をかえて現在も沿岸各地域に多く残り仮設施設での経営を続けています。復興の遅れが中小商店街の今後の経営に大きく響くだけに、各商店経営者たちの想いは如何ほどか、また訪れる少人数の来客者に対してでも深々とお礼をし、手を振り見送る姿にはとても複雑な想いをしました。

8. 最後に

災害は日本のどの場所でも起き、どこでも被災地になる可能性があります。

今回の研修を機会に、災害への備えや災害時の対応の再確認、また今も続く東北被災地について今後も引き続き応援していきたいと思います。

釜石市について



地理的特徴：釜石市は、岩手県の南東部、三陸復興国立公園の中心に位置し、世界三大漁場の一つ北西太平洋漁場の一角をなす三陸漁場と典型的なリアス式海岸を持つ市です。平野部は少なく、西は松倉山や仙磐山などの北上山地に、東は太平洋に囲まれています。



気候の特徴として、夏はやませの影響を受けますが、北上高地からフェーン現象によって暖められた風が吹き降ろす事によって岩手県内で最も高い気温を記録する事もあり、東北北部としては珍しく、38℃を超える猛暑日を観測したことがあります。



「釜石駅前の大島高任 像」

近代製鉄業発祥の地：釜石市は盛岡藩士・大島高任が鉄鉱石を原料として様式高炉を用いて鉄の連続生産に成功した日本近代製鉄発祥の地です。市の北西部に位置する橋野鉄鉱山は平成 27 年 7 月にユネスコ世界遺産にも登録されました。

最盛期の市の人口は 9 万人を超えることもありましたが、東日本大震災やその影響による製鉄所の高炉休止に伴い、現在の人口は 3 万 6 千人ほどです。

ラグビーの街：かつて新日鐵釜石ラグビー部（現在は釜石シーウェイブス RFC）の活躍によりラグビーの街として有名になった釜石市は震災後の復興を進める中でラグビーワールドカップ

2019 の開催地に立候補しました。見事、平成 27 年 3 月にラグビーワールドカップ 2019 の開催地に選出され、市の復興・再建は新たな展開をみせています。



2016 希望郷 いわて国体



わんこきょうだい

(左からこくっち・とふっち・そばっち・おもっち・うにっち)

視察に訪れた2016年は「第71回国民体育大会 2016 希望郷いわて国体」の年でした。

10月1日(土)から10月11日(火)(水泳競技は9月4日から9月11日)に行われた大会において、釜石市はラグビーフットボール(成年男子・女子)、トライアスロン、水泳(オープンウォータースイミング)の3種目の会場として競技が実施されました

都道府県別総合成績で岩手県は男女共に2位、岐阜県は男子10位、女子13位でした。

派遣職員 伏見 七夫 さん

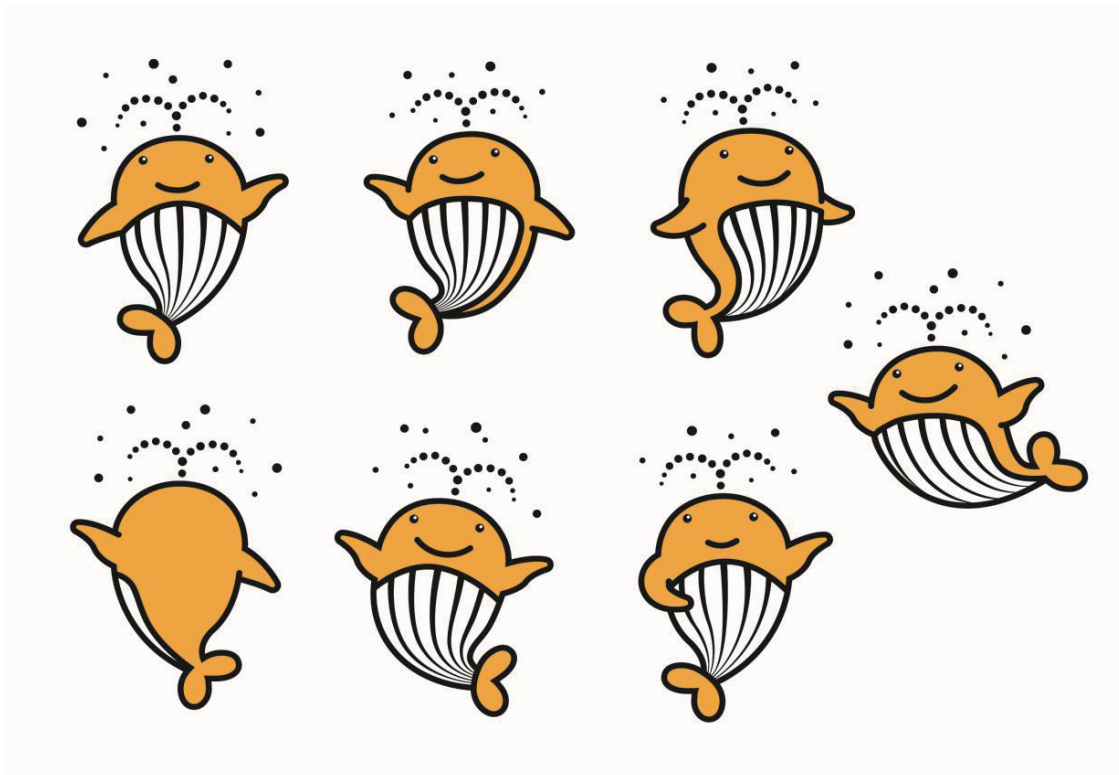
平成28年3月31日付で高山市役所を定年退職されましたが、第二の人生は被災地支援に取り組もうと、4月1日付で再任用の道を選び、岩手県釜石市へ1年間派遣されています。仮設住宅で被災者とともに暮らし、支援に取り組んでみえます。

1979年4月に旧大野郡高根村に就職され、2005年に高山市へ合併した後、畜産課長や農政部長を歴任された伏見さんは、平成26年に農政部で部下の女性から地場の農畜産品をデザインした、手作りの紙製シルクハットを贈られたことをきっかけに、派手な姿で街に繰り出し、飛騨牛や野菜などを観光客らにアピールして見えました。

高山市でも釜石市でも名物おじさんとして活躍されています。



伏見七夫さん(60)



市町村研修センターの事業は、市町村振興宝くじ(サマージャンボ等宝くじ)の収益金によって運営されています。

釜石市視察研修レポート

発行所 : 公益財団法人 岐阜県市町村振興協会 市町村研修センター
〒500-8384 岐阜市藪田南5-14-53
ふれあい福寿会館第1棟13階

TEL (058)277-1153

FAX (058)278-0678

E-mail kensyu@gifu-shinko.jp

URL <http://www.gifu-shinko.jp>